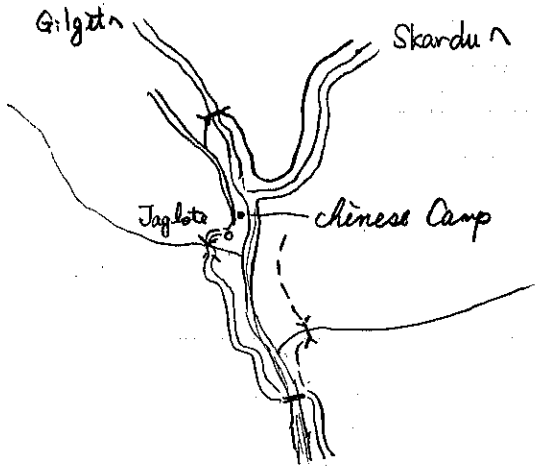
1 July, 1974

晴. 朝から jeep の手配をするが なかなか思う様に手配できない.



ジャグロットは. ラワルピンディからギルギット. フンザへのトラックのメインルートからスカルドへの jeep Road の基地となっている. 南にはナンガパルバット、ラキオト・ピークを見る事ができ北にはラカポシの美しい姿も見る事ができる. けっこう大きなオアシスである. 村人が青いものを持ってきてくれたがけっこうまい。ナンガパルバットの写真を撮りながらかもをかじるのもけっこうまかった。

jeep の必要台数は total 7台. ラワルピンディで ヤク等買い込んだため 3台は余計に必要となった。しかも Jaglote-Skardu 間は政府がヤクの輸送に jeep を使用しているため実に jeep のチャーターがむづかしい.

陸路か空路かという点でいろいろ問題もあるが Karakorum の open にともない. PIA あたりがもっと力を入れて transportation の問題を解決すべきであろう.

いまわしくも. 金の入ったサブザックが先発河本. 山口組のジープから消えうせた。不注意もはなはだしい話しである. 金額も怒っている. 約90万円也. 35000 RS ほどである.

全くぼやぼやしているではないか.

2 July 1974

たぶん晴. 八田氏 完全ダウロッキーで 朝から レスト ハウスの
あみベッドの中にダウン. やれ日本食がくいたいの 何は.
のどを通らないと. いろいろ言って 回復させようという意思
が見られないみたいだ。
Nakit君(House keeper, shop keeper)のはからいで
インダス・トラウトを食べさせてもらう. 40~50cmぐらいで
皮のかたいトラウトであったが味の方は. けっこういけた。

3 July, 1974

ようやく jeep 2台を手配する事ができ、八田氏も元気回復しつつあるので出発できる。

ギルギットとの道と別れ吊橋をわたってすぐに jeepable load になる。up. down. カーブと、正に、よくもあの通れるものよと、思う道を慣れているせいかすごい speed で進む。ドライバーに助手に、小生の3名が乗った運転席は非常に狭い、助手は、インダスへたたきおとされそうなほど、端に乗っている。

4 July 1974

Sassi から2つ3つ奥のオアシスに止る。ジープ2台とまわりをかためてねた。

朝5:30起床。チャイと、プラタの朝食を取る。ここからしばらくは、マップタウンのキビシイジープ道が続き、やがて、はるかかなたに、スカルドのフラッドがかすんで見えてくる。

スカルドに入る手前にきれいな池のあるオアシスがあり、レストハウスがある。pm12:00 スカルドの U.N. ハウス着。金35000RSがなくなったという報告を受けガックリした。

Ⓘ=◎ Ⓘ=①

Telegram Office へ行きラワルピンディとのコンタクトを試る。T.T. system で大使館と連絡し送金してもらえるかどうかcheck するために電報を打った。河本さんが Skardu に残りcontact してみて、天気の回復を待ち、ピンディへ飛ぶ方法と合せてとにかく20,000RS を手に入れて Base Camp へ上ってくるようたのんだ。7月20日までにはずBC.着せよと言っておいた。

pm 5:30 Skardu 発 pm 1:40 Khapalu 着。

good place。レストハウスへ入る。全員とはいかなかったがとにかく、装備も集結でき、やれやれである。思えば実にあわただしい旅であった。しかし日数はかなりかせぐ事ができた。

ハスポーターのやとう件で問題があったらしく、リエゾンオフィサーがえらくもんくを言っていた。自分をなぜ信頼できないのかと言っている。

日が美しい夜であった。Khapalu 手前の峠で先行の jeep のブレーキパイプが切れる事故があり、2時間ほど寒い中で stop する。

朝はアプリコットの実がいたる所にあったので取って帽子一ぱい jeep につみ込んで Skardu まで食べ通しであった。

◎①◎◎
夕方ちょっと雨

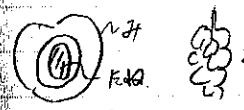
5 July 1974.

とうとうKhapaluまでやってきたと言う感じである。朝7:00起床。夕べからハイポーターの件で、俊さんとマムーンの間でトラブルがあったらしく、マムーンは、すでにSkarduで7名のハイポーターを決定してKhapaluまでつれてきてしまったし、ジープに乗れなかった3名にカルルーまでのジープ代40ルピーずつ与えてしまった。小生にはその間の事情がわからず、ここはLiaisonの言うようにしておこうと考えて、Khapaluまで来た。

朝から、アセインというコックを使って食事の用意をしておいてくれるため、今日からはまともに食事ができそうだ。

きのう、アプリコットの実を食べすぎたためか、今朝はパキスタンへ来てはじめて完全なゲリをした。

Khapaluの高度は、2470mを示している。



アプリコット

今日の仕事は

1. ハイポーターの決定

リエゾンオフィサーの考えも入れ、俊さんの考えも入れという事で、小生、朝から頭がいたかったが、ハイポーターをレストハウスの前庭に集めて、口頭面し向、クランポン、(アイゼン)の使用方法を知っているかどうか、英語ペラペラ/が、O.K.であるかどうか、年令、出身地、Expeditionの経験の有無等checkし、ふるいにかけて、7名のハイポーターを決定し、再度、Doctorにより health check pm 10:00 pulse 80. 体重 60kg.(ちょっとやせてきたな)

をした上、全員を決定した。トラブルなくおわる。

2. ローカルポーターの食料等 及びローカルポーターの手配、ザックの手配。

Liaison を通してポーターに与える食料を分けて、他のものは 27kg 程度に再 Packing する。八田、酒井、山口、西内の4名がよく頑張ってくれた。

ローカルポーターの総数は 93名となり予定より13名多い事は多かったが ハイポーターの食料等を含めると十分に少な目となったと言える。

Skardu で仮採用したハイポーターのうち 3名はジープに乗れずに Khapalu までやってくる ジープ代 1人 40 RS を要求された。120 RS 支払ったので Khapalu でこの3名は雇用せず 120 RS の損をしてしまった事になる。ハイポーターの人選を終ったころのこの3人がやってきたが、こちらは知らん顔でいた。

レストハウスには フランス人夫妻が Gilgit の PTDC の役人といっしょに来ていた。Khapalu ↔ Saling 間は 2年後には橋がかかりザックが消えゆくとの事で我々の遠征隊が最後の報告体になるだろうし我々の写真をとりたいと言っていた。

明日からのキャラバンを控えて 60ポンドの荷物作りである。八田さん途中から気分が悪くなり ダウン後さんと交代する。さっそくハイポーターを使ってみんなうまくやっている様だった。フープがけ、キャンバス入れと、けっこうたいしたものだった。

ローカルポーターの値は、60 lb で食料を与えて 18ルピー と言う事で決ったが考えてみればべらぼうな値段である。食料なしの 18ルピー がよい所ではないか。Liaison Officer が勝手に決めてしまうわけであるが、この件ははっきりさせておかねばならない。

きっと京大隊も我々の値決めにびっくりする事であろう。

Khapalu には病院があり、軍医が一名いるそうである。Doctor は、あるりょうしの娘を見に行ってくだものの実をもらってきてくれた。甘いぶどうの様なものである。

レストハウスのベランダで手紙を書く。母と兄へのもの。

①①①○

6 July 1974

AM 5:00起床
6:00食事
8:00 ポーターへの荷物引わたし完了
8:00 ザークの荷たし start.

8:10 8:20 10:30 11:20 12:10 13:40
① 正 正 正 正 正 —
60

1013 mb = 760mmHg

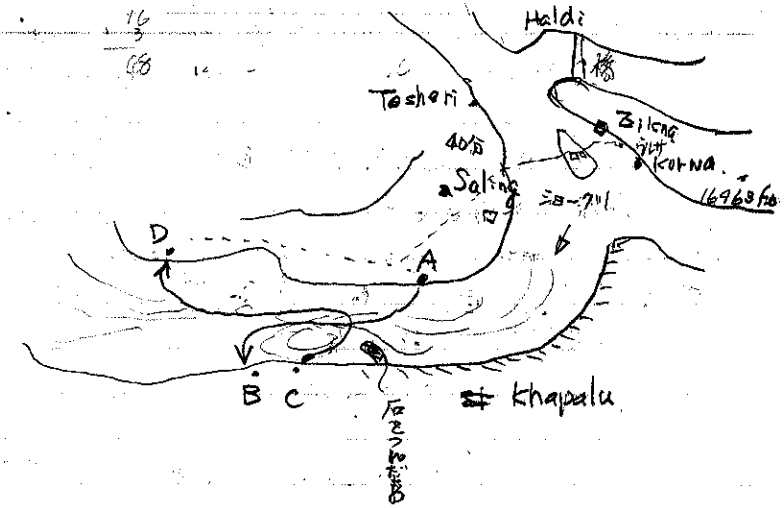
9:30 サリーンへのザーク荷たし場 2415 m 964 mb
8023 ft

2301) 2415000 (8023
2409
700
602
1000

ウルサ

朝食のプラタには、ケロシンが入っていたため食べる事できず。

Khapaluでポーターを雇うつもりは全くなかったが、リエゾンオフィサーの一存でKhapaluでやとってしまった。ザークの荷たしは、2回8:00から始めて13:40までかかった。
ザークは、聞いての通りゴートの皮袋をふくらませたもの20～30個をやなぎがポプラの枝にくくりつけたものである。支払いは、1そう10ルピーを要求してきたが、あまりにも高いのでかなり頑張って5ルピーに値下げした。
フランスの雑誌記者がアドバイスしてくれたが、土地の者は



口ハで疲っているようだ。今10ルピーはらうと次は15～20ルピーとだんだん上っていき、後の遠征隊のためにならない事は言うまでもない。

2:30 Saling着。大きな木の下に休む。
今ポーター達にわたす食料の分配をやっている所である。(pm3:00～4:00)

1. ポーター頭の名前　マディ

2. スカルドレストハウスの名前

[illegible]線は今、Salingからショークの方向サルトロとの[illegible]が16963 ftでありその少し下に[illegible]と見てさしつかえないだろう。約48[illegible] m

4:40 Saling発　6:30 Zikna着。

ザークの渡しに時間がかかったので先発として、山口と、エブラハムをフーシェ谷の渡しよう点の偵察に行かせた。空身で行かせたのは失敗であった。

フーシェのめたしは膝までが3回、太もも3回で川の横断に1時間要した。マッシャーブルムがだんだん回復した。天気の中、西日に輝らされて堂々たる姿を見せてくれた。

26回目のザークに乗っていたポーターは、すばらしい歌をうたいながらショークの対岸へ、進んでいく、美しい光景である。

リエゾンオフィサー　マムーン君の、登山についての第一歩のcheckは今日できた。まず歩き方が全くだめ。すぐにあごを出し、呼吸をハーハーいわせて進む。ルートの判断は全くできず、渡渉ポイントのcheckもあまりできないが、まあ、1ケ月程度の訓練では、何も得る所はなかろう。

八田氏　再び不調

10, 1, 2, 4, 5, 6　と調子悪く、良かったのは3日だけ。明日から仕事はやめさせる。

Salingの対岸はウルサ。ウルサのテントサイトは、休耕地の様な所で夜2mほど上を流れる用水の土手が切れ、ハイポーターを含め全員で大さわぎして水を止めた。

八田氏が又もや熱を出しDoctor stopがかかる。

ウルサでは、ひつじの肉を食べる、料理のせいか、水が悪いせいか、あまりうまいとは思えなかった。

○○①①

7 July 1974

Häldi 2930m 951 mmb
Thalda 2600m

朝5:15分起床。今日は快晴のうちに一日が始った。6:35 No.1グループのポーターが出発 7:10には全隊がウルサを出発した。八田氏の体調は悪く ウルサに少くとも半日は滞在し回復するのを待つ事にして Doctorと Doctor付ローカルポーター2名を残す事にした。

ローカルポーターの歩き方は 3分から5分こばしりにして ずぐに荷物置場を見付けると休み こうして オアシスを通り抜けていく。かと思えば 速いピッチで 30分ほど頑張る事もあり おもしろいものだ。

麦畑や アプリコットの木の下を通っていく時は実に楽しいものであるが、オアシスから オアシスの間には 緑は全くなく 太陽がじりじり輝りつけて 苦しい歩行である。

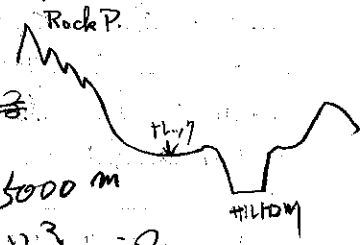
サルトロカンリの報告書にあったとおりの橋が10年以上たった今も同じ姿で 小生の目の前にある事など カラコルムの古い時代からの民族の行動が思われる。

ウルサを出ると 30分ほどで フーシェ谷の流れが左岸へおしよせて 壁のへつりとなる。その手前で 再び渡渉である。50m～100mほどの高さに登って 右手の低くなった支尾根を廻り込むと サルトロ川が合流してくる。

フーシェ谷は直線的な谷で マッシャーブルムの姿が谷の奥に堂々と見える 今朝も快晴で その姿は すばらしかった。

今日のキャラバンの行程は
ウルサ — Haldi — Tagas — Tholdi であった。

ハルディの手前でテントを張ってしまった。Tagasのオアシスをうるおす水は 町の中心の扇状地を急な岩壁の谷間から流れ出る。アッチャパニーで 橋が掛っていた。ここで 水をのみ 休んだが 顔や頭を冷すと実に気持が良かった。又馬が手に入ると言うので 手配し Captainへ手紙をそえて Haldiへ送った。



Haldiから Tagasの間は カール状の所を歩くが 150mほど登って Tagasの手前で再び80mほど下る。左手には 4000～4500 あるいは 5000m 程度の Rock Tower が林立している。この林立からは Kharala 後方のピーク等が残雪に包まれて美しく見えている。先は長いようだ。明日からは少し荷を軽くして行こう。

夕方 八田氏が Haldiへ着いたとの報告をローカルポーター2名から聞く。

今夕食は アルファ米とみそ汁 それに カレーで実にうまかった。

明日はブラクオーレ止りだろう 八田 Doctor liaison 待たねばならない。

アグヤ スライドにて マッシャーブルム [illegible]

○○○①

8 July 1974

5:20 起床　7:00 キャラバンラスト出発.
8:00 Tholdi
11:10 Brakhol
朝食は プラタ 1.5枚と 目玉焼 2個に紅茶であった。
トルディからすぐに Chino に入る 小学校の先生とあいさつする
遅れていた 八田さん Doctor も Haldi を出発 後を追っている
事がわかった。Chino を出ると ブラコールまで けっこう長い 雨水も
ないが 左手から滝となって水がおちてくる このあたり マッチャ
ハニーであった。ブラコールは何の事はない ダンサムの対岸で
Chino から案外に近かった。
Captain, Doctor, 八田 は Haldi からやってくるので,
今晩 Brakhol 止りとして 休養させる事にした。
ドクターが ブラコールホスピタルを開業 大繁盛である.
甲状線のはれた人 目の悪い人 水虫 インキン, 傷口がう
んで ジメジメした人 日射で 目を赤くしたもの等々 スヤに
なるほど続々と やってくる。たいした事のないやつには,
ウメジンタンを ていねいに数えて与えてやる。
930 mb …… Brakhol pm 6:23 (2710 m)
ブラコール(ダンサム)の右岸の岩壁は高差 7~800 m 垂直で
大オーバーハングがいくつもある 砂岩性の壁である.
ここからサルトロ川は 右に ダンサム川 左にコンダスリと
別れる 左へは 90° 曲って 北へ向う いよいよ シェルピガン
氷河へ入っていくわけである。

- pm 7:00 チキン代 20 RS モハマッドへ与える。
- ポーター用 Salt ダル代 7日, 8日分 93 RS × 2 = 186 RS 与える。

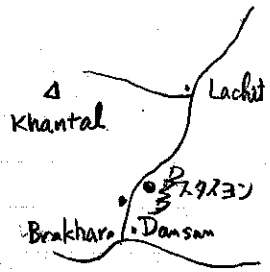
八田, 山口, 相変らず調子悪い.
ブラコールで マウンティンライオンの子をマムーン君がかった。
50 RS である Base Camp でかうんだそうだ. Milk しかない
のに うまく行くかしらん。
八田氏 馬にゆられてやってきた。半分歩いてきたそうだ。

○○○○

9 July 1974

5:15 ブラコール発
9:00 Lachit の川の橋 K6 見える
9:30 [illegible] の丘 2825m 918mb

Lachit の谷の名は カンタール ナーラ
K6の稜線上のピークは カンタール Khantal



ソン … 行け

ブラコールから Lachit への道は 影になってとてもしのぎやすかった。

朝 4:40 pulse 74
11:40 〃 84 …… 約1時間の休養後

pm 7:00 カルマディン 2960m

Lachit での昼食 昼休みは楽しかった。Doctor は Hospital を開業 酒井、西内、小佐 がアシスタントになって ジンタニ や ビタミン剤を与える。
一方 山口は Porter達の歌とおどりのグループへ入り 楽しいひとときを過す。

Lachit から カルマディンへの道は 次々の現れる サルトル カンリ チョゴリザ K7の姿に見とれ楽しいものであった。
コンダス谷の水は灰色であるが 氷解谷の側壁にはたくさん 滝があり、これは、日があたって 水量が増すときは アッテ である。

①①②①

10 July 1974.

6:10 カルマデン発
10:00 コルコンダス　昼食ブレーク
14:25 コルコンダス発
17:00 氷河出合にてキャンプ（3660m）

ホシブー という花束をコルコンダスの村人が運んできてくれる。シェルピカンリが我々の前に姿を現した。感激の一瞬である。"写真をたくさん撮る。

コルコンダスの人々は、シェルピ・カンリを Sheri Ganri（シェリ・ガンリ）と呼んでいる。Sheri は大きいとか偉大なとかで、ガンリは氷のある所とかいう意味である。

コルコンダスで昼食後、ママチョ、エブラハムをつれて、B.C までのルート偵察に出発する。今日は1日氷河の出合までとして、明日、Sherpi Gang 氷河の左岸のサイドモレーンづたいに登高を試る。B.C 設営のための最も重要な偵察である。今日はゆっくり休んで明日は2名のハイポーターにまけないだけの働きをしなければ。

カルマデンを出ると道は右岸づたいに急な登りとなる。左手に鬼のうでの様なグラナイトのロックタワーがそそり立っている。それをすぎるとやがて右手にコルコンダスの村が美しい緑といきたけなわの Siachen につつまれて現れてくる。そして突然左手から Sherpi Kang

が美しい。そして たくましい姿を見せてくれた。Sherpi Gang は、その前面を守られ左右からくるグラナイトリッジはまるで Sherpi を守る厚い城壁の様であった。その奥に左右に美しい雪稜を広げた姿は、まさに、女王クレオパトラが衛兵たちにまもられて衣をつけて宮殿にすわっている様だ。

Liaison Officer に 93 RS ポーター
sheep　40 RS
beaf　30 RS　購入

コルコンダスは最後の村なので Khapalu からのポーター達はここから奥へ行くためには衣料とか食料の準備をしなければならない。それで今日は半日行程として明日一気にシェルピガン氷河の第1 ice fall の Side Morain のガリーのある所まで入る事になった。Base Camp は何が何でも第1 ice fall の上の設置しなければならない。明日は、この第1 ice fall の突破ルートを見付けるのが reconaisance party の役目である。明日 low porter がガリーまで入れば、明後日は、ice fall 上へ出る事ができるであろう。

今日は、八田氏の調子も回復しつつあり、あと山口、隊長さえ元気になれば言う事はない。

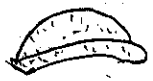
今日は PM 8:00 の交信をおわれば、すぐに寝よう。しばらく続いた晴天もそろそろ終るのではないかと思える空になってきた。

①②②①

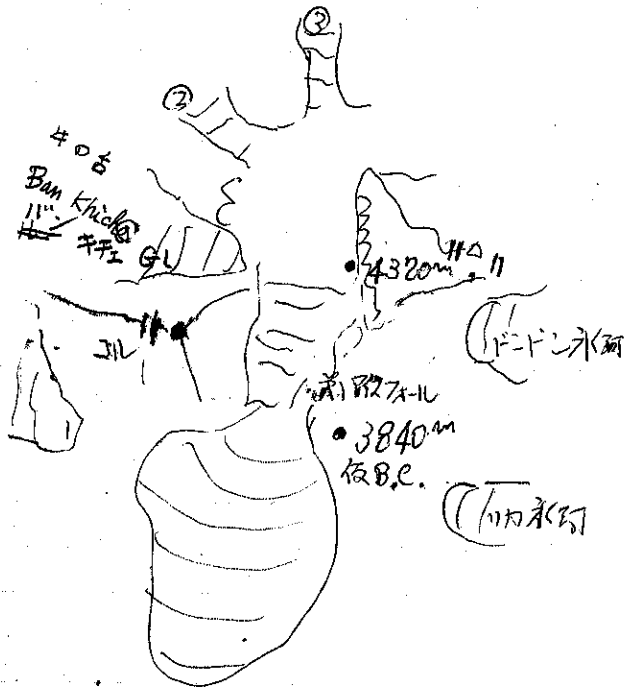
11 July 1974

カルカのキャンプ発 6:00
ドンドンGL 9:00
第1アンスフォール上部 12:00

ぜりをやって朝食は印一コだけ、チャイを飲んで出発したが調子悪い。それでも休むごとに高度の上るのは実に楽しいものであった。ドンドンとリカの中間で3800mを越す。
そして、下から(コル、コンダス)見えていた、S字形のモレーンづたいにシェルピガン氷河の第1アイスフォール帯へ入り、サイドモレーンの草付を進む。がとうとうそのサイドモレーンもなくなり、どろに汚れたセラックス帯へ入ってしまい、日射のため、氷がとけて、落石と氷の崩壊があり進めなくなる。しかたなく、そこでキャンプし、翌朝突破を試る事にする。体調おもわしくなく、実に不快であった。
本隊のキャラバンは、コルコンダスを出発、ドンドンGL、リカGLの間のリッジの末端の氷場3840mの仮B.Cへ入る。ここで93名のローカルポーターを解雇し、強そうな連中30名のみを残し、B.C.入りに備える。
ポーター代は、食料を与えた場合、18 RS/day であり、帰りは2日間として、18/2 = 9 RS/day × 2日とする。残した30名のポーターは、ざっそく石囲いをやって、その上にビニールシートをかけて待期。

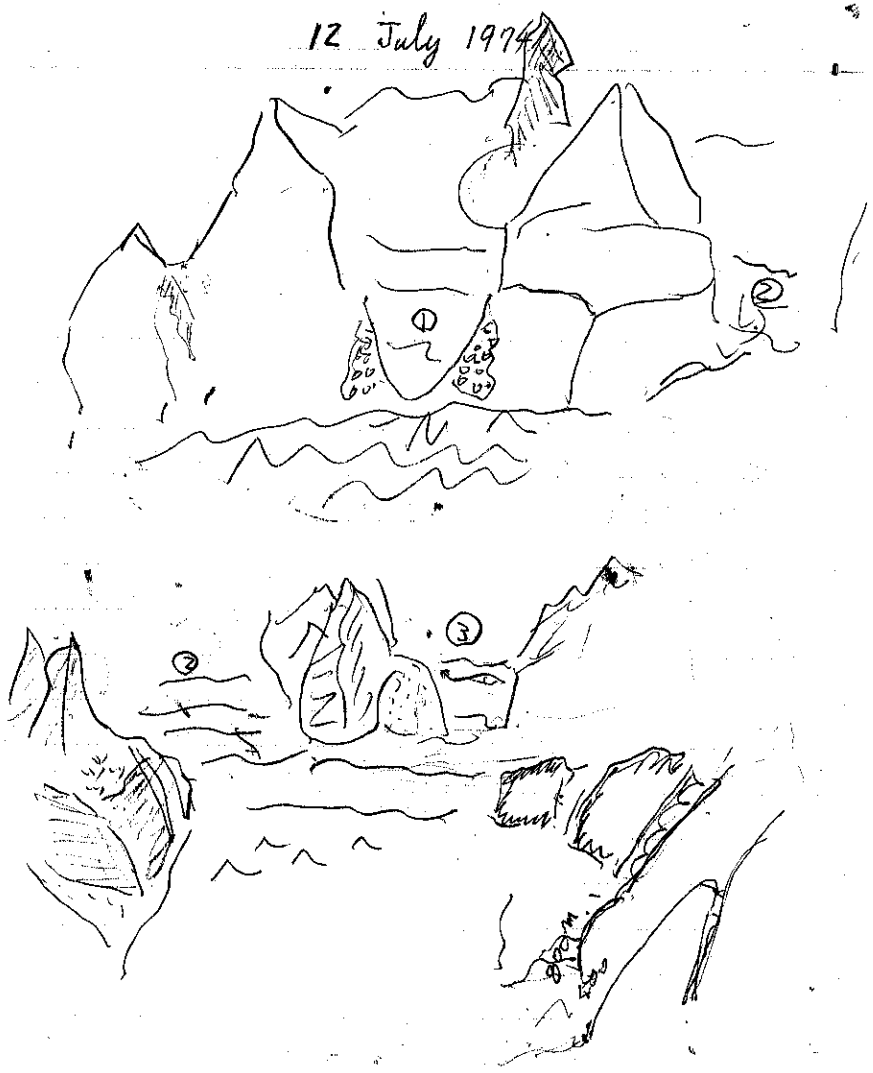

バルティ帽

バルティ ミューズ



(14)=⊙ (15)=⊙

12 July 1974



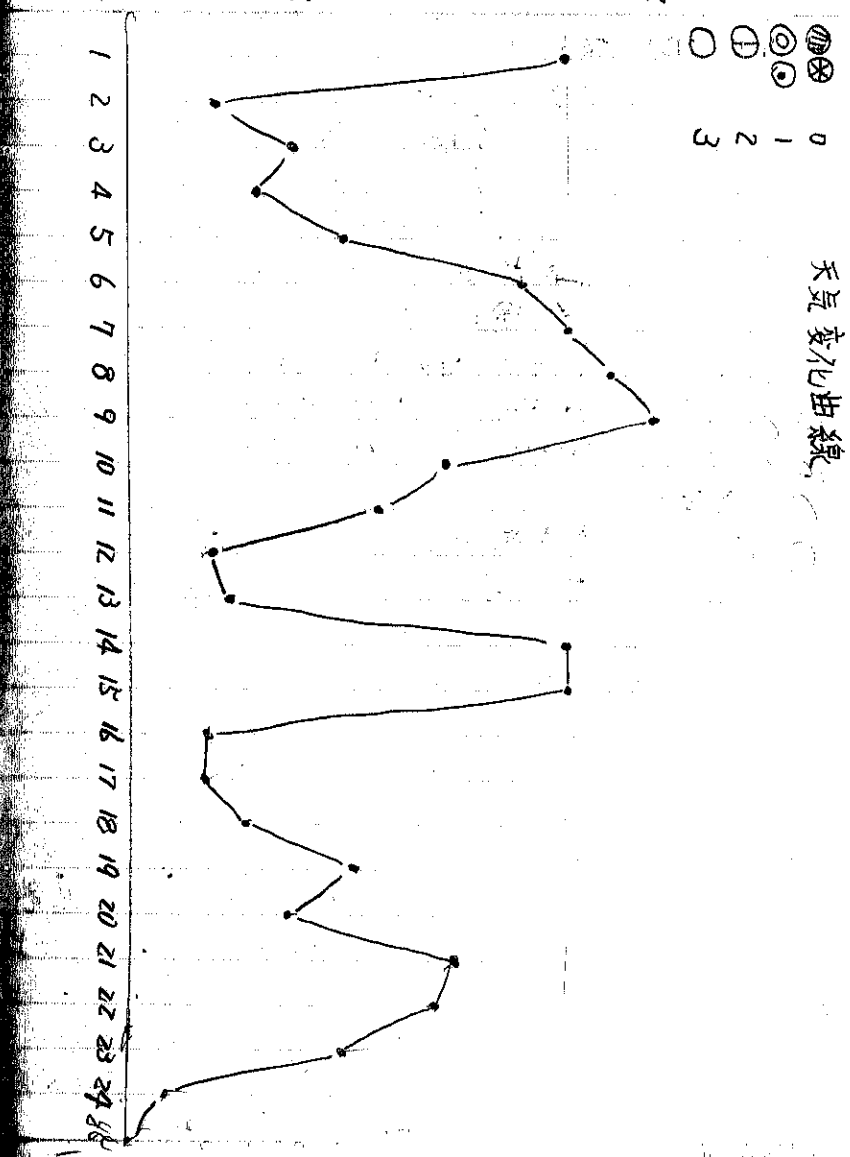
後さん、山口、は右岸のガリーをつめ 4500m のコルへ達す。

まき代 12RS
河本さんのポーター代 90RS
肉代 20RS

6:50 キャンプ発 (4260m) pulse 90
9:00 アイスフォール 200m 程進む
10:00 チャイ飲んで下山にかかる。

我々の偵察は完全に失敗に終った。ジェルセ・ガンジ氷河は長大なicefallが2段3段と続く、第1icefallだけでも高差500m ありしかも高度が低いため氷はもろく、休みなく崩壊し続けている。西内、井上、ママチョ、泥れマッドで、ガッティングしながら進むがすぐに行き詰まりとうとう、100m～200m 程でストップとけて落石はげしい中を急いで引き返した。明日はドンドンリッジ越えのルートを捜しに行く。これに失敗すれば今日後さん山口が偵察した右岸ルートを探らざるをえなくなる。これは長くしかも困難なルートとなるであろう。願わくばドンドン越えが簡単である事を祈るばかりである。

今日は河本さんも合流し全員ようやくそろったわけで、夕食は日本食として、圧力ガマでα米を炊きうまいうまいと皆んなで食べた。今日は山口の誕生日だとまう年でおいわいだけ言って、おしまいである。BC、板橋隊にもう一度かわってやらねばならない。



◎⊙◎◎

13 July 1974

AM 6:00 起床、朝食済 pulse 80
プラタ ½ 枚、チャイ3ばっ マグロフレークのスープ

AM 7:30 仮B.C 高度 3845m 指示、
pulse 74

AM 7:45、空缶の雨量計をSetする。

朝、ポタポタと降り出した雨はAM6:00頃から激しい本降りとなり、AM7:40現在、ガスがテントサイトを包んでしかも良く降る。今朝、皆の顔を見ると、八田氏はむくみが来て、上まぶたが厚くなっている。バラサーブも目の上がはれている。山口は右目にメバチコを作っているし、酒井は熱を出している。

AM 8:45 高度計指示 3840m

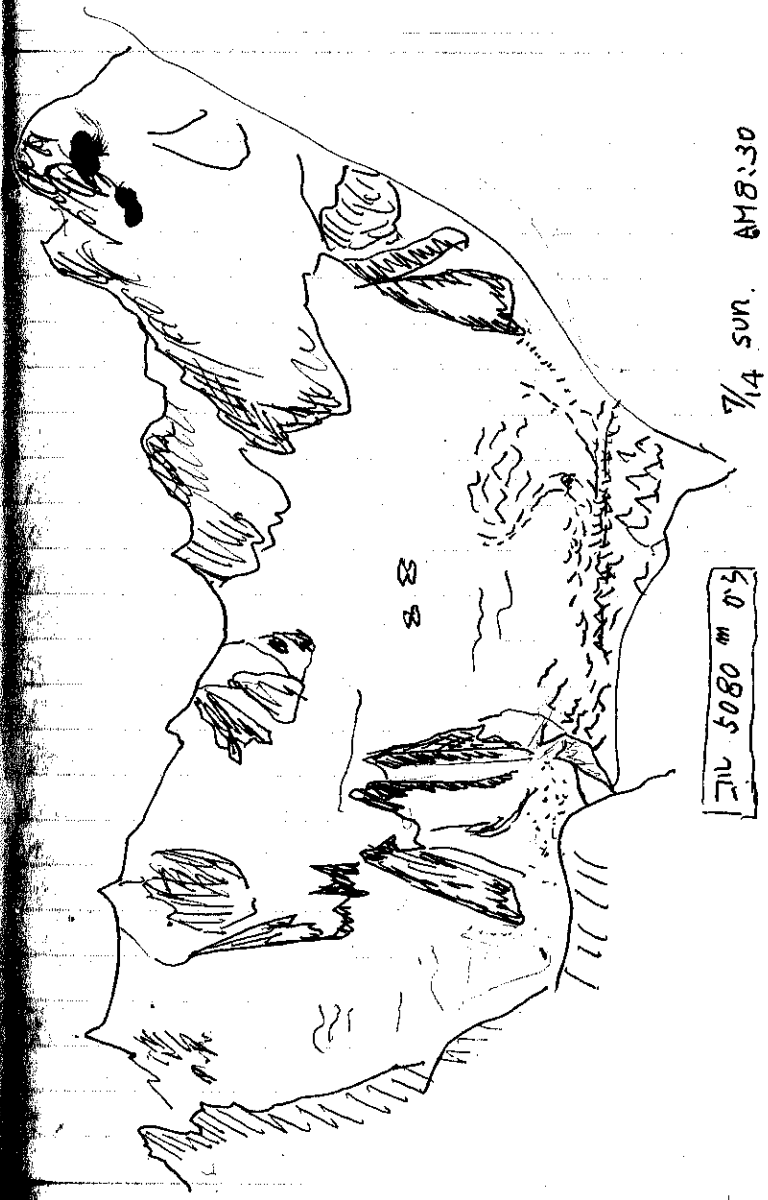
AM 7:45 ~ AM 8:15 の雨量 2mm

メスルランナーが手紙をもって仮B.C.からKhapaluへ返っていった。次にやってくるのは、2週間後の27日か28日である。

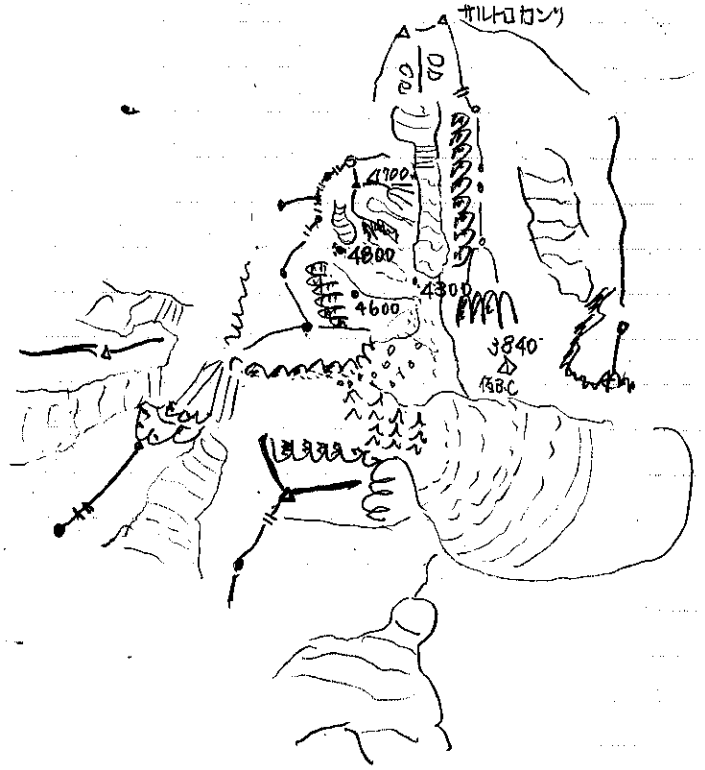
ポーター達は、ビニールシートやプライシートの中に入って雨をしのいでいる。やはり元気に歌を歌っている。

俊さんもサークルに入って、テープレコーダーを使って録音している。今日でポーター達は2日間の沈殿である。早くB.Cの決定をしなければならないが、あせる事もなかろう。何と言っても未知の山である。十分な偵察と慎重な行動を取らねばならない。

今朝の雨は9:00には上った。ガスは4000mまで降りてきた。これが今回の悪天の底であろうと思う。



シェルピ．カンリは遠い



AM10:50 雨があがり．ドンドン氷河へ偵察隊を2隊出発させる．ドンドンリッジの6000m峰を境に上下2隊．

上隊．西内．河本．モハマッド．フセイン

下隊 井上．八田．ママチョ．エブラハム

~~14~~ 13 July, 1974

下隊は、

12:00 ドンドンカルカの出合 4300m 地点、
13:00 草付のコル 4600
14:00 チョクGl. エンドモレーン 4800m キャンプ
18:30～19:45 4950m 地点まで登高を試る

我々の偵察は、Sherpi Gang Gl. の左右両岸ともいいルートが無く、シェルピへの最短コースとして、ドンドンリッジ越えを考えたわけである。しかし、ワークマン一行もこれには成功していない。

ドンドン氷河の登りは仮B.Cから急なエンドモレーンを登りつめ、氷河の右岸アブレーションバレーに出る。ここは、カルカの様な所でドンドンリッジには草付がある。しばらく行くと左手から大きなガレが降りてくる。このガレの左すみに、水流があり、これと草付の間を登る。やがて右手奥に小さな氷河がモレーンに包まれて、落ちているのがわかる。この氷河のモレーンにキャンプを設営しポーター2名を帰らせる。

9方、河本氏の心臓の具合が悪化したと言うので、西内に仮B.Cまで下山する様に伝える。B.Cは7pm 6:00の定時交信は出ず。

我々は今後を考えこの氷河の最低コルへの登高を試みたが高度障害のため達せず。

14 July, 1974

AM 6:50 キャンプ発
8:30 5080m の最低コル着。

肉類が食料のパックに入っておらず苦労して夕食を作ったが朝もみそ汁と紅茶で済ませる。

小さなプリムスは、けっこう時間がかかる。
コルはすぐそこに見えているがけっきょく1.5hかかる上部はひざまでのゴジラおとしでラッセルが苦しかった。それでも早々と5000mを突破してしまう。残念ながら、このコルの向側は急なルンゼが7～800mストンと切れ落ちており、しかも、それはSherpi Gang Gl. の先日小生が偵察した左岸の行き詰り地点からほんの少し上流寄へ落ちている。全くの役立たずであった。

しかし、Sherpi Gang の右岸一帯は一望のもとにでき俊さんの偵察したルートの上部ブランクになっていた第2氷河の状態が手に取る様に見えた。

第一と第2氷河の間のリッジは上部がインゼルの様になっている。第2氷河の奥は広大なice fieldになっており、氷河湖が2つうかんでいた。このコルからはSherpi Kangriは見えず。

仮B.Cと連絡し、Dong Dong の奥のコルを探すための偵察へ行ってもらう事とする。田中、船津、西内、酒井の四名。

ドンドンリッジの岩稜がDong Dong氷河へ突出している[illegible]山と、カレトロカンリの壁が東正面に聳える。すばらしい。

○○①①

15 July, 1974

AM 10:00 起床

今日は小生の休養日。洗たくとか、頭をあらったりする。コルコンダスのPortorを30名雇用する。(夜の話し)

山口、酒井の2名がきず B.C入りする事となった。B.C入りには、4500mのコルを越して行かねばならない。

さすがに Khapalu, Saling の Porter達は、高度の障害のせいか、頭痛をうったえるものが多い。Doctor は薬を与えるのに忙しい。

せっかく薬を与えしんせつにしてやっているのに連中文句を言ってとうとう解雇するに致った。さっそくコルコンダスのポーターを雇いにコルコンダスへポーターを走らせた。ママダリは印等を買込みにやはりコルコンダスへ下っていった。

B.Cへのルートは、仮B.Cから100mほど下って、リカ氷河の氷流がシェルピガン氷河へ吸い込まれて行く所から氷河へ入り、オーギブの波づたいに円弧をえがくように右岸へ出て、サイドモレーンのBankを越して、アブレーション谷へ入り、例のガリーをつめるわけである。ガリーの高度差は、取付3700、コル4500 従って800mの登りがあるわけ。コルからB.C予定のキャラガへは200mの下り 従って、Sherpi Gang Gl の第1ice fall は600mの高度差がある。

コルからは、コルコンダスの緑が見える。このガリーは実に急で半分は軽い岩登りと草付登りがある。

コルの下の第1キャラガには エーデルワイスの群落があり、目を楽しませてくれる。

◎◎▨▨

16 July, 1974

AM. 5:00 起床

9:30 st

PM 1:50 B.C着。

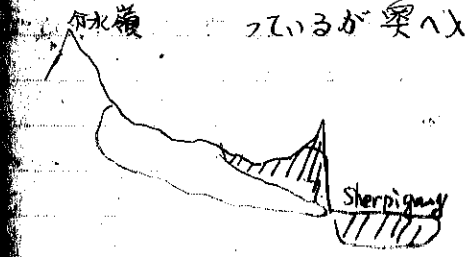
ポーターを B.Cまでつれて行くのに一苦労する。(Khapalu porter)

山口、酒井、ママトセンで第2氷河をわたり切り、ガレまで偵察する。

残り6名はB.C入りとする。コルコンダスのポーターの数がそろず今日一日では全装備をB.C.へ入れる事ができずに、Liaison Officer に残ってもらう事にする。コルコンダスポーターはさすがに慣れており、何ら文句も言わずにB.Cまでやってきた。

Base Camp は高度4300m。北方右手に晴れておれば シェルピ、カンリの雄姿と、第2 ice fall の厳しい姿を同時に見る事ができる。左手には シェルピの分水嶺から岩稜が降りて来て、シェルピ・ガン氷河にその末端を削り取られる手前で急に高くそびえ立っている。

従って どの枝氷河も入口では両岸がそびえ立っているが奥へ入ると広い氷原をもっている様である。



B.Cは シェルピガンの右岸その末端のコル付、踏跡でトレッガーと呼んでいる平坦である。多くの平坦がはられB.Cとしてふさわしい。

17 July, 1974

AM 7:00 オッサンの日本茶で始まり、B.Cの初夜は明ける
AM 8:00 プラタと紅茶の朝食をとる プラタにケチャップとマヨネーズをつけて、食べるがけっこうういい。

全員B.C入り、キャラバン中の食料難を一気に解決すべく、昼ごちから食べるたべる。圧力なべで、ひやむぎをゆがく。1たば約4分30秒でゆがきその後冷水に入れてさらす。大成功である。粉わさびにしょう油としいたけ、本だしのつゆにねぎをうかべて、実にうまかった。夕食は夕食で日本式にチキンカレーに卵を入れて、サケとアスパラガスのサラダにマヨネーズ、デザートは餅菓と全く満足するだけの食事であった。

Captain Mamoon 君は、夜B.Cでの後始末をつけて最後にB.Cへ入ってくれた。支払いは河本、田中両氏にまかせる。

B.Cへ西から入ってくる氷河の舌端はシェルピの支流が他はすべてice fallとなって本流に入ってくるのに対し、牛の舌の様にドロンと入ってきているのでBan Khiche Glと名付けた。

カラコルムの雨はシトシトと長く降り続く。カラコルムには雨はないと言う事であったが良く降るものだ。

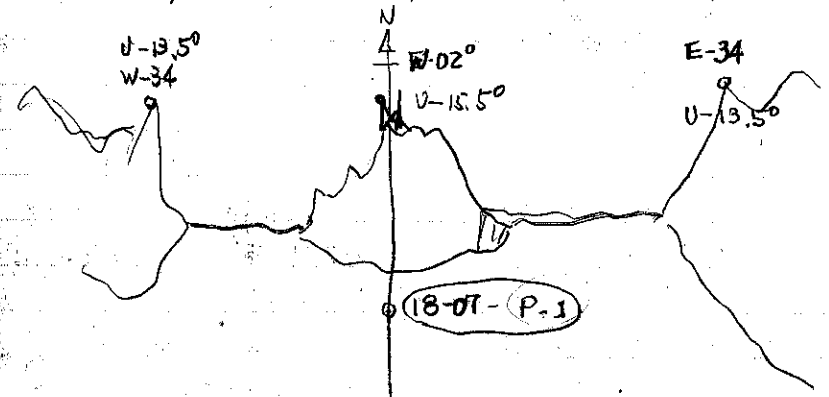
B.C.建設Party. ビールでかんぱい。

18 July, 1974

6:00 起床 雨 相尿量検査

1 − 500 cc	5 − 150 cc
2 − 350 cc	6 − 250
3 − 520 cc	7 − 150
4 − 360 cc	

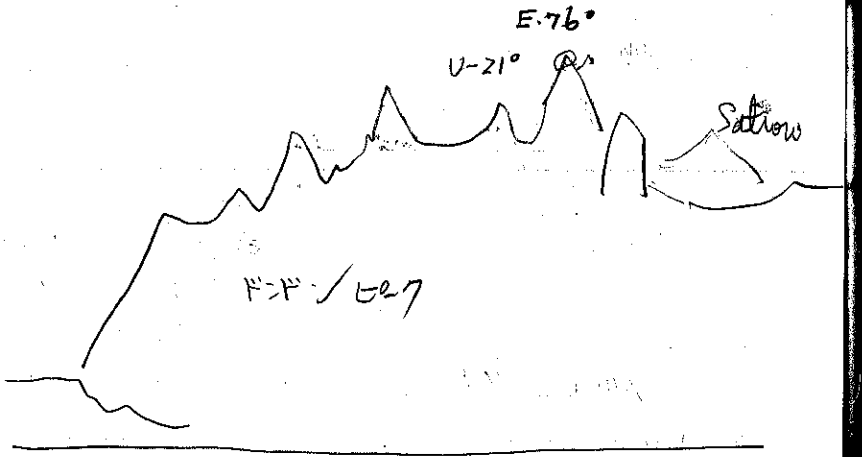
AM 12:00 pulse 70 呼吸数 24 息こらえ、1分20秒

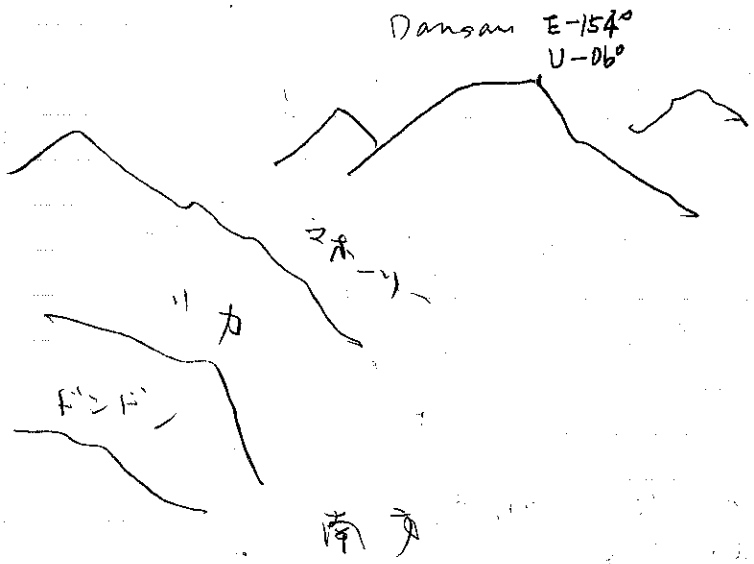


E-78° Saltoro
U-18.7° A-4560 m.

Sherpi Kangri W-24° U-16°

荷物の整理等をかたずけ、緑のテラスへポッカする。オ2氷河への下降ルートは急なルンゼで上部から80mフィックスロープを張る。ユマールの試用を少しかけて順次行く。





①①②④

19 July, 1974

第3氷河のルートを求めて偵察に出る。

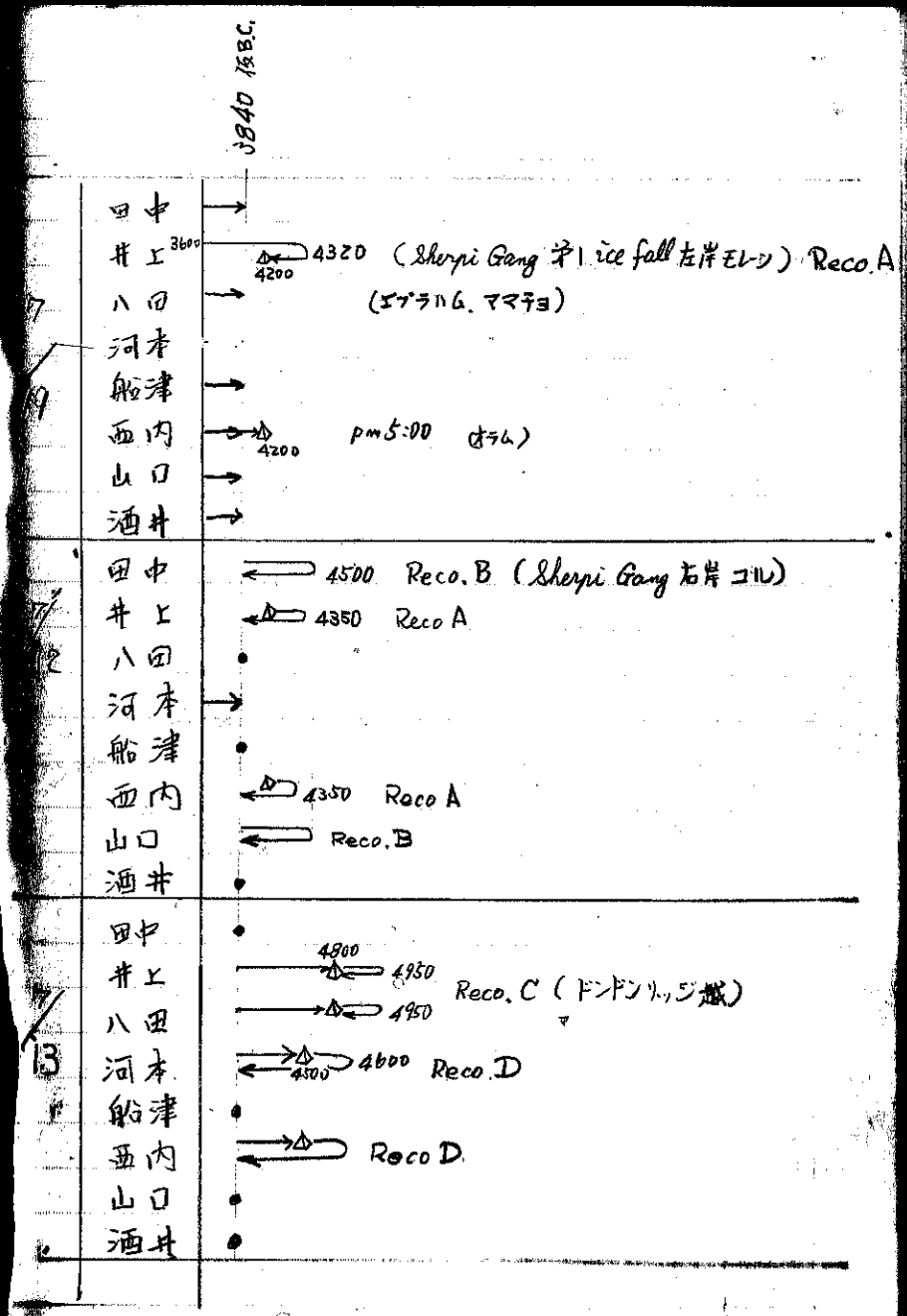
西内 井上、ハイポーター ママチョ、ママトセン
で Sherpi の西稜にルートを求めるべく出発した。

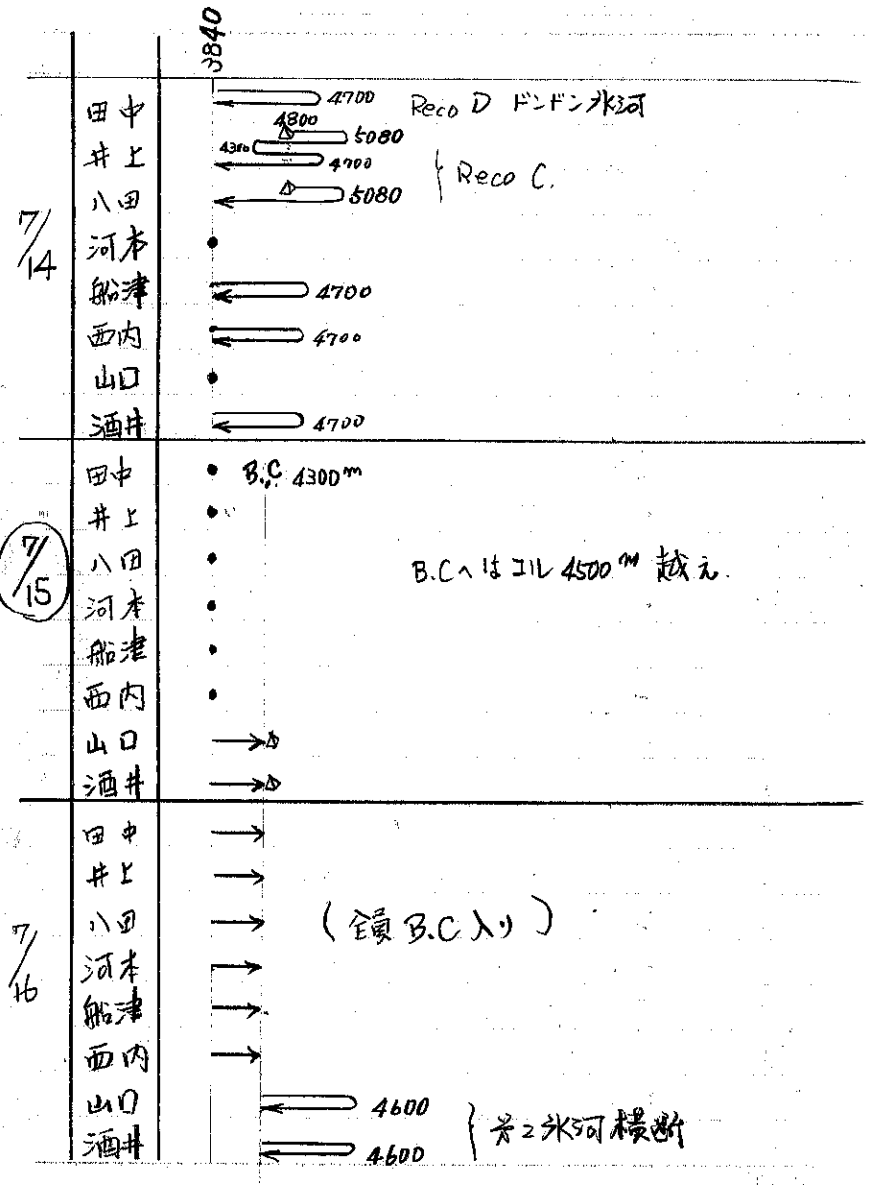
7:50 B.C発
8:30 ~ 9:00 台地
9:00 ~ 9:35 ルンゼ下降
11:30 4670 m 深いクレバスのある所
13:00 T.S着. 4815 m
13:30 ママチョ ママトセンをB.C.へ帰す出発

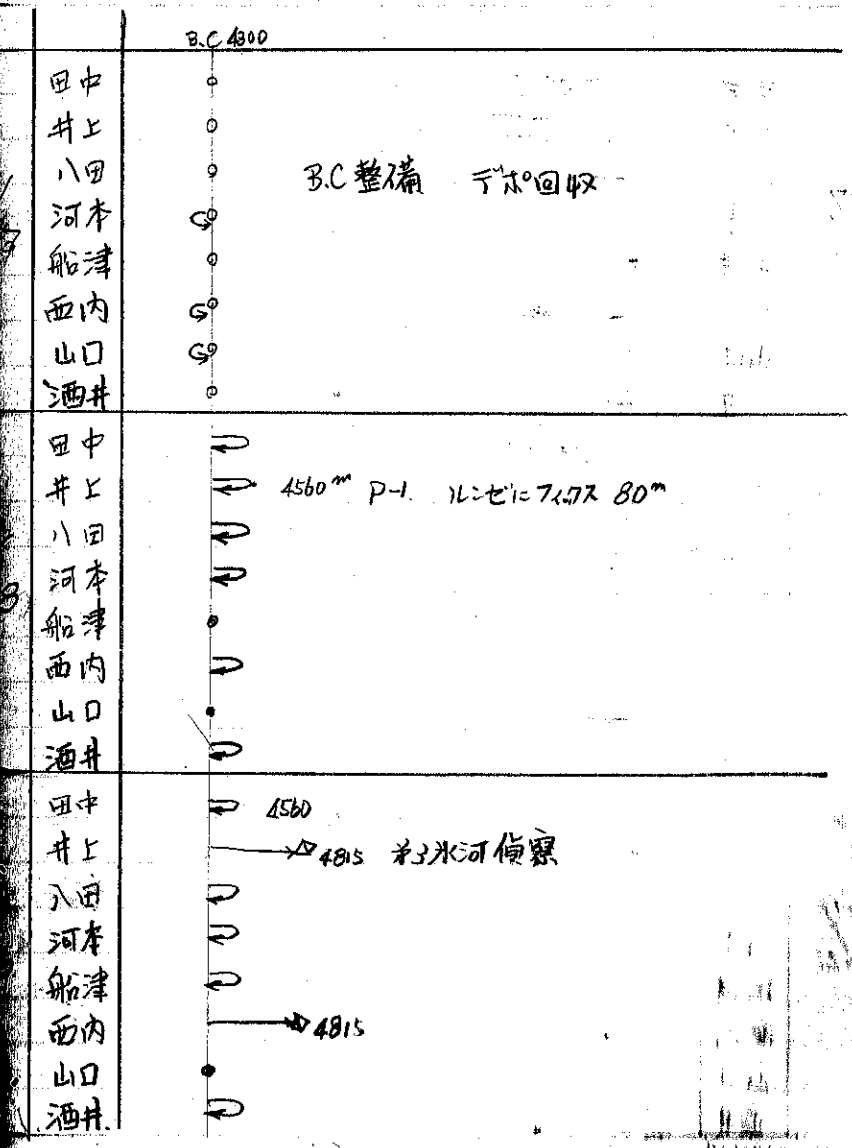
20 July. 1974

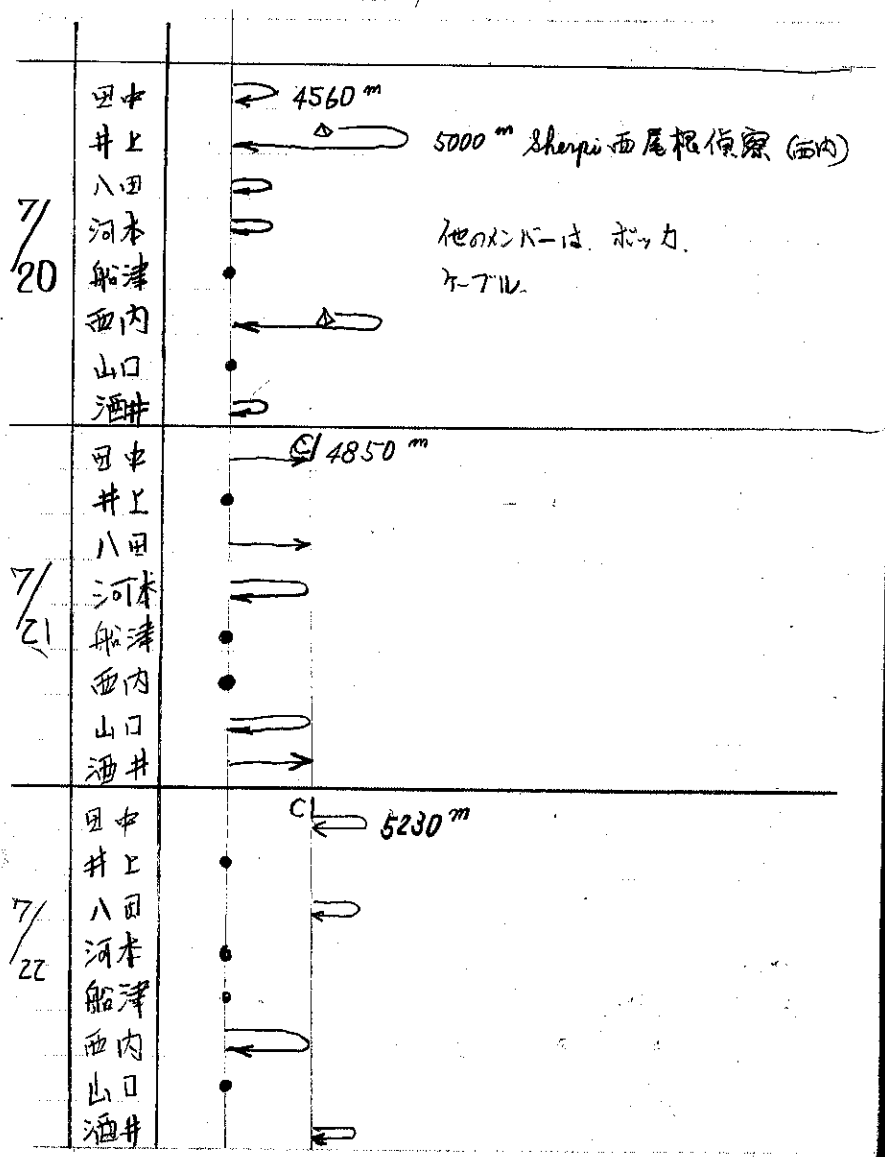
7:15 テント発
8:30 氷原の取着

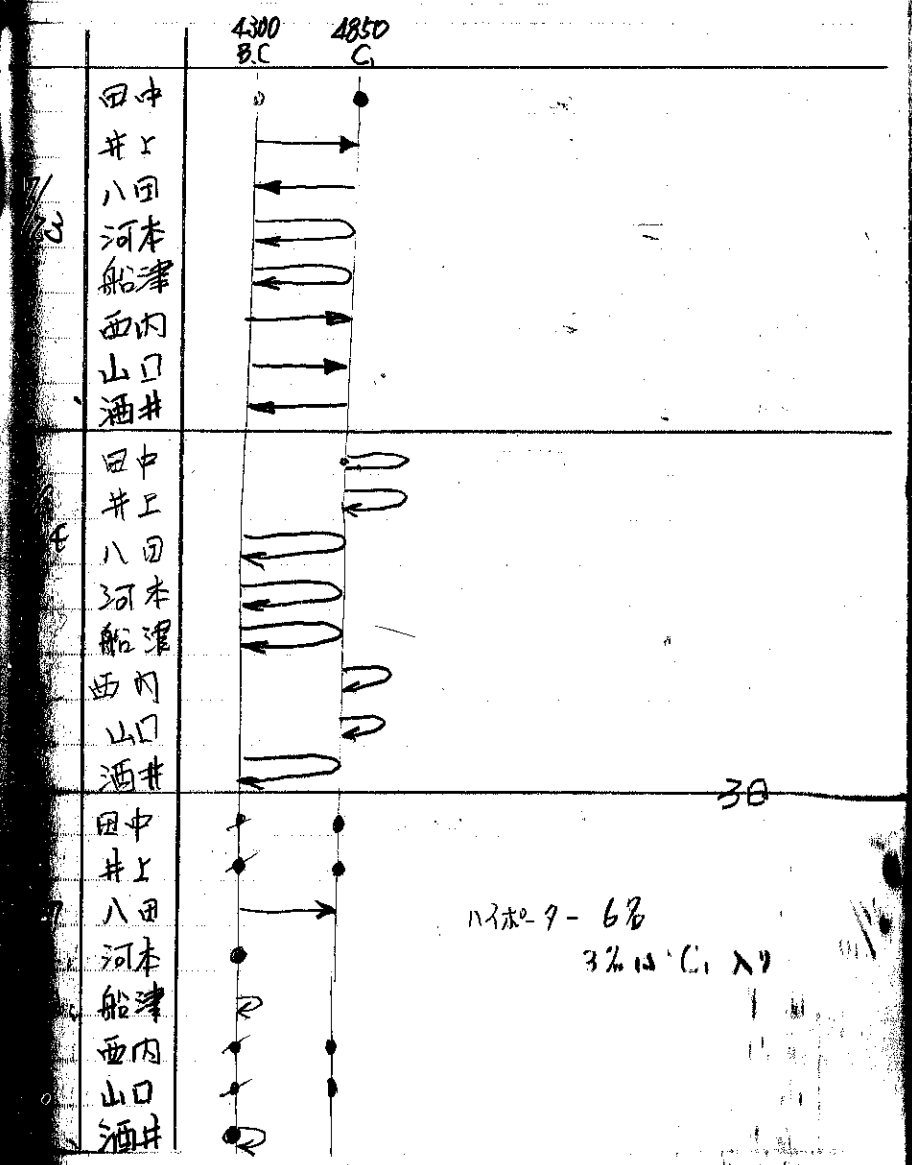
7:15 st
7:40 4900 9:50 引返し点 11:00 TS 帰着

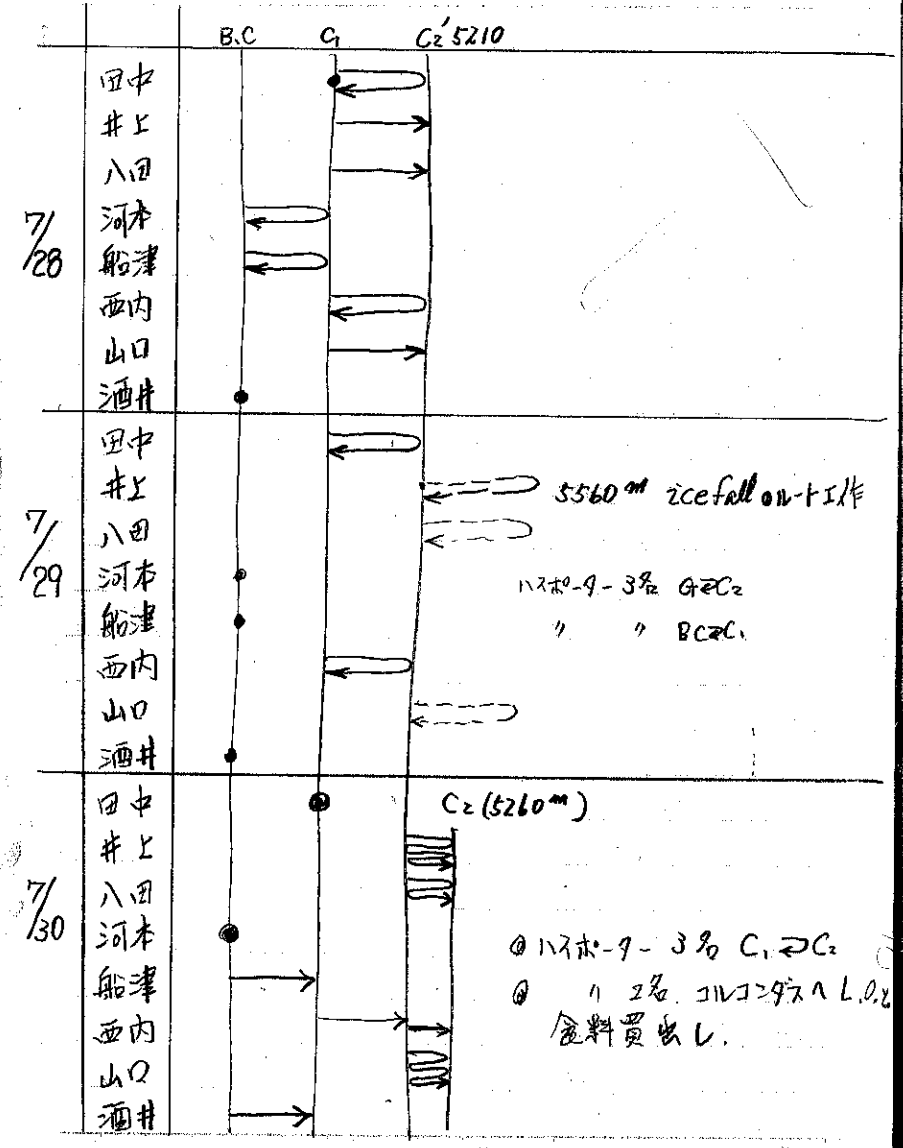

3840 16.B.C.
田中
井上
3600
4320 (Sherpi Gang 第1 ice fall 左岸モレーン) Reco.A
4200
八田
(エブラハム、ママテヨ)
7/9
河本
船津
西内
pm5:00 (ボラム)
4200
山口
酒井
田中
4500 Reco.B (Sherpi Gang 右岸コル)
7/12
井上
4350 Reco A
八田
河本
船津
西内
4350 Reco A
山口
Reco.B
酒井
田中
4900
井上
4950
Reco.C (ドンドンリッジ越)
八田
4950
7/13
河本
4500
4600 Reco.D
船津
西内
Reco D
山口
酒井

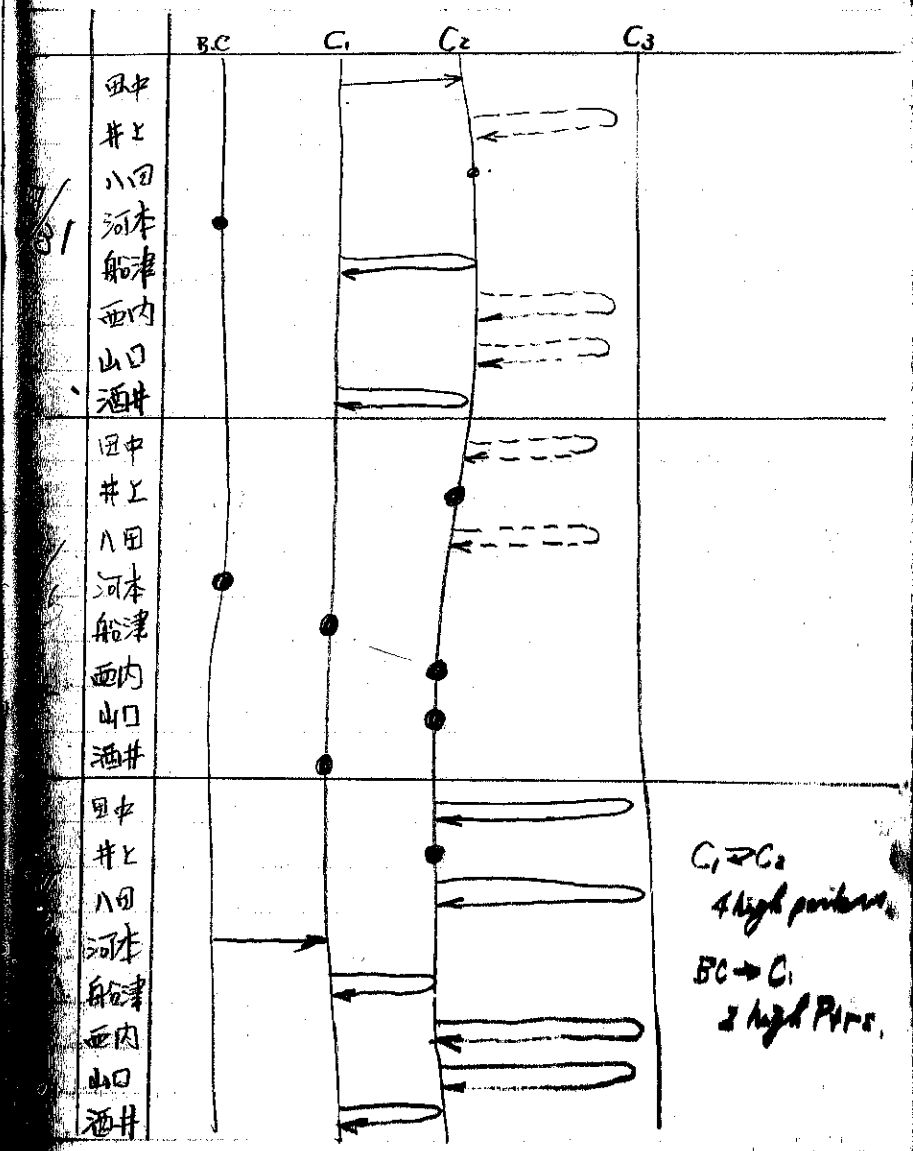

3840
7/14
田中
井上
八田
河本
船津
西内
山口
酒井
4700
4800
5080
4380
4700
5080
4700
4700
4700
Reco D ドンドン氷河
Reco C.
7/15
B.C 4300m
B.Cへはコル 4500m 越え.
7/16
(全員 B.C入り)
4600
4600
第2氷河横断


B.C 4300
田中
井上
八田
河本
船津
西内
山口
酒井
B.C整備 デポ回収
4560m P-1. ルンゼにフィックス 80m
4560
4815 第3氷河偵察
4815


7/20
田中
井上
八田
河本
船津
西内
山口
酒井
4560 m
5000 m Sherpi 西尾根偵察 (西内)
他のメンバーは、ポッカ、ケーブル。
7/21
4850 m
7/22
5230 m


4300 B.C
4850 C1
田中
井上
八田
河本
船津
西内
山口
酒井
ハイポーター 6名
3名は C1 入り


B.C
C1
C2 5210
7/28
田中
井上
八田
河本
船津
西内
山口
酒井
7/29
5560m icefall on ルート工作
ハイポーター 3名 C1⇄C2
〃 〃 BC⇄C1
7/30
C2 (5260m)
ハイポーター 3名 C1⇄C2
〃 2名 コルコンダスへ L.O.と
食料買出し.


B.C
C1
C2
C3
田中
井上
八田
河本
船津
西内
山口
酒井
C1⇄C2
4 high porters
BC→C1
2 high Pors.

①①①①

21 July, 1974

終日晴。サントリー国際ハウス、キャンパックス等のコマーシャル写真を撮映する。小生、腹の調子悪く、おまけに色々食べたために下りが止らない。今日は、C1建設に田中、八田、酒井の3名が入る。

19日、20日の偵察の結果、シェルピの西稜は、カベリ氷河側の支氷河へ切れ落ちている事が判明し、残されたルートはSherpi Gang氷河の本流をひたすらつめて行く東稜ルート以外にない事がわかり、このルートをキャンプを進めていく事に決定したわけである。まだ全員の体調が良いとは言えず前途多難の感じである。

河本、山口は、ハイポーター4名をつれて、C1へ荷上げである。約80kgの荷物がC1へ上った。

昼過ぎ、コルコンダスへ行ったアシスタントコックのママダリが帰ってきた。

にわとり	5羽	20 RS	100 RS
ラグリー	11束	20 RS	220 RS
マンダー	32ケ	4b RS	16 RS
バター、野菜			21 RS
		Total	357 RS

の品物を購入する。

C1の位置は、Sherpi Gang氷河の右岸で第2、第3氷河の出合の少し上、ガレ場の上で、第3ice fallの落口である。高度4850mで不満ではあるが、B.Cから一挙4560mの台地を越えて、行くのできあがったあるまい。

①①①⓪

22 July, 1974

7:00 西内、ママ[illegible]、ママトセンの3名、C1へポッカ、約80kgの荷物を運ばせる。西内もあすからポッカ。

小生もC1入りする予定であったが、体調思わしくなく、B.Cにて休。朝食はα米少々と、みそ汁、卵焼少しを食べ、胃腹薬3種類を喫む。

C1では酒井、八田氏にバラサーブがSherpi Gang本流の偵察へ出掛ける。C1からはカルトロとシェルピの稜線に低いコルを見出している。ピラミッド形のピークが2つ並んでいるそうだ。

B.C.での昼食はうどん。山口、河本、Doctorが調子の悪いラジウスに挑戦して、3h近くもかかって、作ってくれたのうどんの実にうまかった事この上なし。

今後の予定等図表にして、作成する。Liaison Officerがフィルムの数が合わないとか言っている。6時の交信でそのむね連絡しなければならない。

12:30 C1ポッカ隊着。

15:20 B.C帰着。

偵察隊の方は、15:55まで行動、5230mまで到達する。Sherpiの本峰とB.Cから見える、ジャンダルムとの間のice fallの南稜とその奥にあるice fallのどちらかを偵察しなければならないとの事。pm 4:00の交信で話す。

明日は、井上、山口、西内でC1へ入り、八田、酒井が一挙B.Cへ下る事とした。河本、DoctorはHigh porterのポッカの指揮を取る。

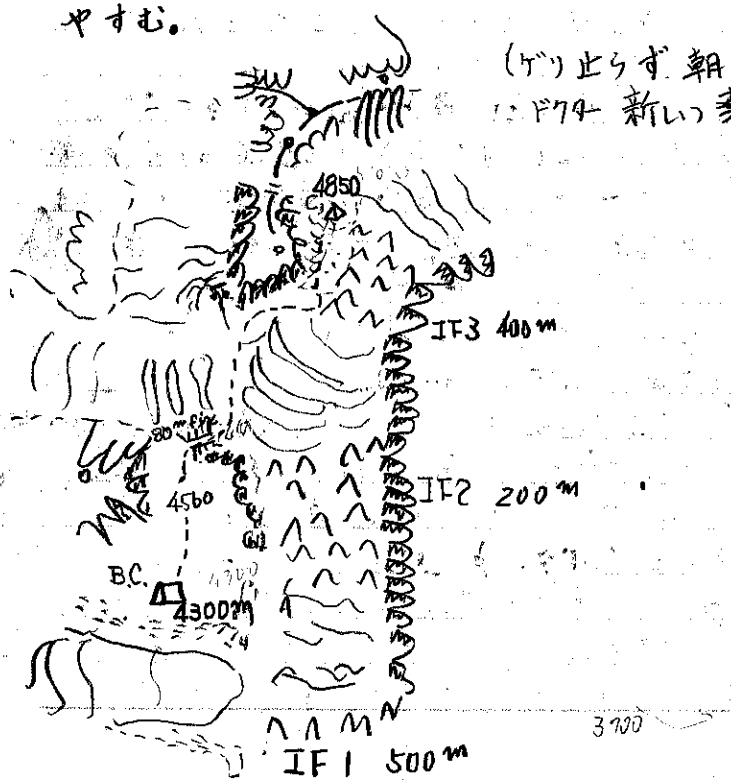
18:00 偵察隊より交信。C1まであと1h ぐらい。とてもしんどい

との事である。夕食前 B.C の対岸に 20 数頭のヤイベックスの群を発見。全員 BC テントからとび出して見る。

- 極用 3 — 8mm カメラ 1
- つかってない 4 — 8mm スハ 1
- カメラ 3

キャプテンの依頼でフィルムの check を行なう。
夕食にはキャプテンがカバーブを焼いてサービスしてくれた。お返しに、びわの缶を開けてすすめる。夕食後、パキスタンルールのポーカーを 1時間半ほど楽しんでやすむ。

(ゲリ止らず 朝1.夕1)
ドクター新しい薬をくれる



23 July, 1974

食事当番 AM 5:00 起床。わかめとほうれん草のみそ汁をたっぷり作る。α米は5人で4袋とする。さらに玉子焼を作り うまいうまい。みそ汁の味が特にすぐれていた。

7:20 B.C 発
9:00 ガリー下デポ出発。
11:05 } 氷河横断完
11:40 }
13:05 C1 着。

Party
1. ママチョ、ママトセン、シュクール、アボッド
2. 井上 山口、オラムモハメッド、エブラハム
3. 河本 船津 西内

下山 Party 八田 酒井 B.C へ下山。(C1 建設隊)。

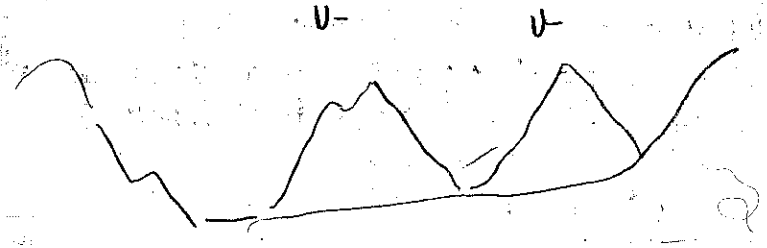
Base Camp から No.2 ice fall の台地までは空身で登る。いつもの事とは言え、しんどい朝の努力がいる。今日は Total 190kg を C1 へ上げる予定だったので全員動員である。第2氷河への下降ルンゼの雪は日に日に少なくなり 今日は氷化した部分が出てきていた。上部でフィックスが岩にすれる所があったので途中外されていたピンにザイルを Set しておいた。ちょっとした注意であるが重要な事である。
C1 へのルートは ルンゼの下の Depot から 第2氷河のオーゲブを利用し 第2氷河と第3氷河の中間モレーンへ出て Sherpi Gang 本流の dead ポイントへ入り 第3 ice fall へ左側から取付くと見せかけて 左側のガレへ入る。
ガレを 250m ほど登ると C1 がモレーン丘の上の平らな雪面に設営されていた。僧さんが白い ice axe で出迎えてくれた。ハイポーター達も元気で、さっとく

荷物をデポして帰って行った。Doctorは4850mが初高度のため、実にしんどそうであった。

後さんに昨日のマイベックスの群の話しをしたら、くやしがっていた。

荷上げに関しては昨日立てた予定通りのBoxがC1へ上りほっとした所である。食料の方は、B.C.食を一部上げているので今日のところはC1食を食べる必要はない。ハイポーター達の技術もだいたいわかったのでそろそろC1以上で使うハイポーターの人選もしなければならない。

C1保有 film　8mm　2
　　35mm　11



C1. (P-2)

24 July, 1974

C2へのルート工作を目的に田中、井上、西内、山口でC1を出発。天気が悪くなり雪が降り出し、第4 icefallの手前ではすっかり視界がなくなり、けっきょくDepotしてC1へ帰る。

AM 8:00 st.　　夜から下り気味
13:00 } 5200m 地点
13:30 }
15:50 C1帰着

雪が激しく降り出す。上部ice fallのルート工作は、天気の良い時にルートを決めて一気に突破するのが良いと思われる。C1からは氷河の左手を100mほど登って氷原へ出る。あとは、シェルピの中央稜の基部伝いに登っていくとジャンダルム1峰、2峰からicefallが落ちてくる。これをさけるようにして上部ice fallへ入って行くわけである。

この5200m付近のice fieldには4つほどice fallが入ってくる。サルトロとシェルピを結ぶ稜線上のピークがいくつかあるし、ドンドンリッジ側からもピーク氷河がおりてきている。久しぶりの大きな気圧の谷がやってきた様である。

みぞれの様な降り方からしだいに雪となり、しんしんと降り出した。

第3 icefallから上は氷河に雪がありルートはジャンダルムの前のクレバスの少い所をぐるりと回る様にして進む。

C2テント、ツェルト、スノーバー、カラビナ、ハンマー、fixロープ等デポする。

⊛⊛⊛⊛

25 July, 1974

小便、大便
正　下

終日雪、日本での話しをいろいろとする。高度計指示は C1で 4930m。プリン、ママゼリー、するめ、ひだら等いろいろ食べすぎたのか、終日雪が降る、あたりの景色も一変してしまったかの様である。

西内が日立での生活の話しをする一方、小生はあゆの料理方法等話す。小船の時は、うくだに が良く、少し大きくなれば、しょう油だき、それに生づくりはもちろん塩焼といろんな食べ方を話す。

息こらえを頑張ったところ 65 sec であった。

手紙を書く。28日には Mail runner がやってくる。母上、平井先生、会社研修課及び標準設計課の4通、課へは、クリフトンビーチの絵はがきにしておいた。

兄貴にも小林広未にも、白形にも手紙を出さなければならない。

C1 から Sherpi Gang 氷河の奥を見あたすと左にジャンダルム2峰と本峰からの南稜があり、ずとんと切れおちて広く険しいコルがある様に見え、氷河の中央には三角形のすっきりしたピークがありその右にもう一つ重なる様にして雪のピークがあり、右端は Dong Dong Ridge に終る。Sherpi と三角形のピークの間は何となく明るいコルの様な気がして希望のコルと勝手によんでいる。奥に snow field があるものと思う。

⊛⊛⊛⊙

26 July, 1974

高度計指示は pm 5:00　4890m

昨夜は又胃腸の調子を悪くしガスがたまり苦しくて何度もポンに行くが、げりは少しだけであとはガスがバッバッと出てどうも具合悪い。朝起きてしまうとどうもなくなるので胃が弱っているためだと思える。12:00まで シュラフの中に入っていた。今日はうまい牛めしとか、プリン、ミルク等を食べさせてくれた。量はひかえ目にしておく。4:00ごろから雪がふりになり、4人とも外へ出て、なだれの写真を撮ったりする。

今朝はコーヒーで朝を迎えた。B.C でも雪が降っている様に、又 ice fall あたりが何とも言えぬ、不気味な様相をしていると、八田氏からトランシーバーで連絡あり。

ザンターの羽毛のシュラフはどうも薄くて、やり切れない。エヤーマットを通して、雪の冷たさがじわじわとやってくる。

今日は、テント内にシュラフをつるして乾燥させてみる。

はる3日間雪が降り続けているわけだが、さて、カラコルムの悪天とはこんなものであろうか。

明日は、第4 ice fall の下へ、C2を張りルートエ作に当る。

2日連続の休で多少ひきももてあまし気味である。

手紙を書いたり、日記の補充をしたりである。

夕食はしいたけめしに、わかめのすのものも作ってくれた。

手紙を書いていると、逆に日本からの手紙がひとと付逆いと感じている自分に気付く。やはりはるばるやってきたからか。異国においては、日本は思い出しては、ただ懐かしいだと言うわけにやはり住みなれたせいか良いものなのだろう。

27. July, 1974

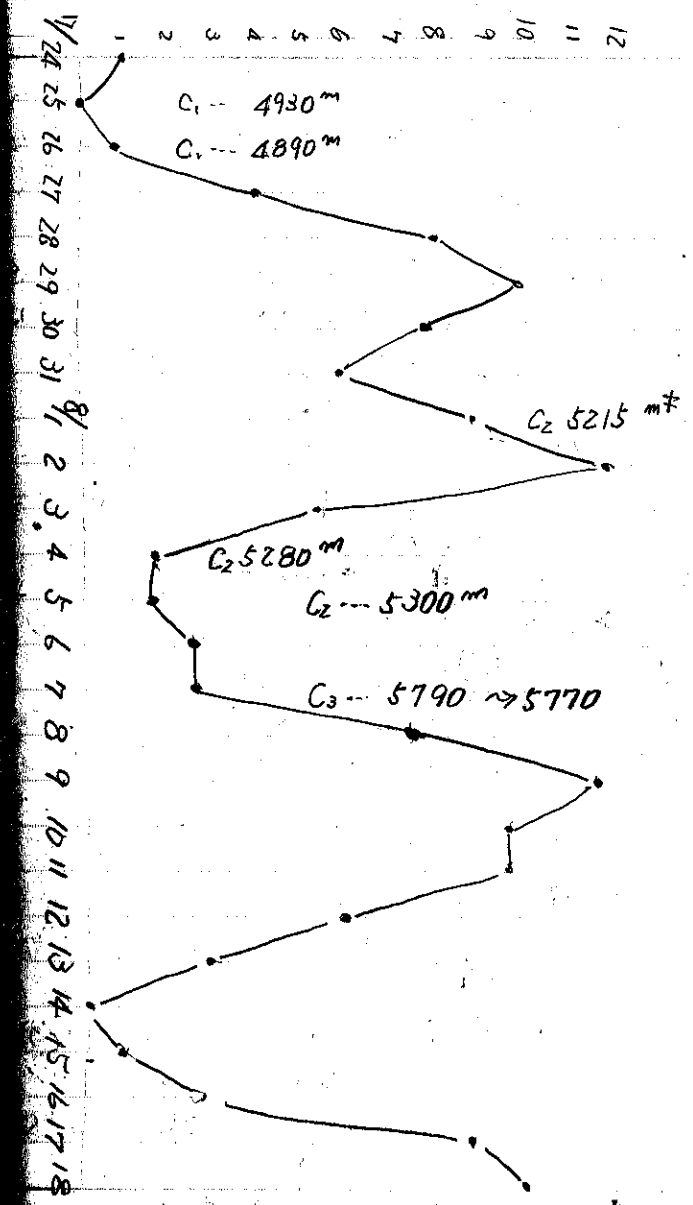
今日も悪天のうちに1日が明けてきた。どうやら腹の調子も回復してきた様でもある。Liaison Officer のラジオを通じての天気予報では early モンスーンとの事であるなるほど数えて4日目の悪天である。

am 7:30 高度計は 4890 m を指示している 25日から比べると 40 m ほど低くなったわけでそれだけ回復のきざしがあると見ても良いわけである。朝一番に小便に行く。400 cc 以上は出たはずである。ここ数日は朝一番にげりに悩び出していたので今日はそうではなく気分が良い。

11:50 高度計は 4875～4880 m を指示する。どんどん気圧が上昇し天気が回復しつつあるわけだ。明日は西内、山口、と小生で C2 入りし C3 へのルートを開く予定である。ハイポーター3名にボッカさせて入れば 5日間ぐらいの行動は十分できるであろう。C2 は 5300 m 程度にしておって C3 を 5900～6000 m におけば、C4 を 6500 以上に出せ頂上への可能性も大きくなってくる。第4 ice fall とその奥がどうなっているかが今後の key point の様な気がする。どの様な山だって、きっと弱点があるにちがいない。C3 を 6000 m 近くへ設置すれば一担 C1 へ下り休養となろう。その後は C4 へのルートを酒井、八田、俊さんにルート工作してもらう事になろう。

今日は B.C. から 八田 酒井 が C1 へ上ってくる。他のメンバーは例によってボッカ 12:00 の交信にて、ようやく B.C 上の台地からフィックスのロープを下ったとの連絡があり、こちらは、C1 下のガレへデポして引き返すものは引き返す様指示する。

天気変化曲線 No.2



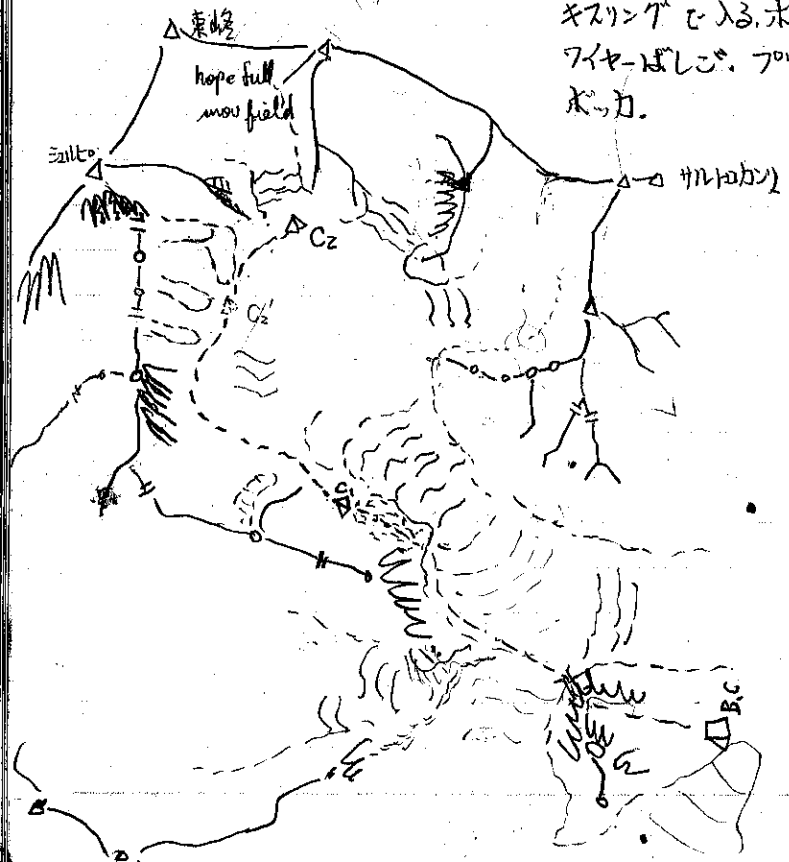
①①①①

28 July, 1974

ようやく晴れて行動する。今日は C_2 へ入って明日 C_3 へのルート工作を行う予定。井上山口、西内で計画していたが八田さんが C_1 入りしたのと西内のハラグアイが悪くなったのとで八田さん C_2 入り。

ハイポーター3名（ママチョ、エブラハム、ハッサン）と井上山口八田田中、西内の3パーティですっかり消されてしまったトレースにラッセルしながら C_2 を目指す。C_2 へ4人用テントたてる。

キスリングで入る、ポール、ワイヤーはしご、プリムス等ボッカ。



①①①①

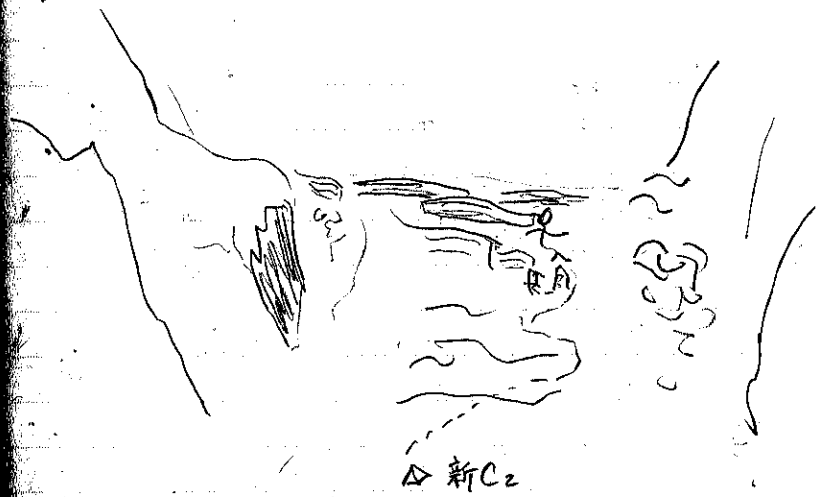
29 July, 1974

6:30 st.

2:00 5560m 引返し点 pm6:30 C_2 着。

いよいよ希望のコルと呼んでいる ice fall のルート工作に出発小生トップで ice fall の真正面からルートを開く事にした。

手紙がくる 母から3通 平井先生から一通 兄から一通 兄からのには 朋子ちゃんのかわいい写真3枚同封されていました。



ice fall の突破には もう一日必要であろう。ルートをさがしながらの登高でけっこう事はややこしく時間もかかる。

帰路 4ケ所 合計 200m の fix rope を固定した。

あと100mぐらいで ice fall を抜けられるだろう。

Sherpi の東峰、ピラミダルな姿を見る事ができた。西峰とのコルは以外に低く見えた。

(井上) ハンツ 毛の野帽 ラテ カメラのレンズクリーナ
ハケ

フ[illegible]ル[illegible]
(八田) [illegible]せんたくき 赤ニッカーホース 黄ソックス
アイゼンバンド サブザック予備
水筒
山口 ハンツ ポスト

坂本さんからの手紙と平井先生からの手紙に テラム・カンクの計画案あり、小生もテラムで下山後交渉するつもりである。
ピンディ Park Hotel ↔ カラチ 兼松の南 Tel でなぎ あと 兼松 ↔ 大阪 Telex で Hot line をつくって交渉してみるのも手であろう。
今回の遠征のチョンボは プロパンガスの輸送ミスにより期日までに入手できなかった事。
3,5000 RS もの現金を失った事 実に残念である。
来年の隊うんぬんも良いが もっとしっかりと準備を進める組織を会の中にうえつける必要があろう。

①①①①

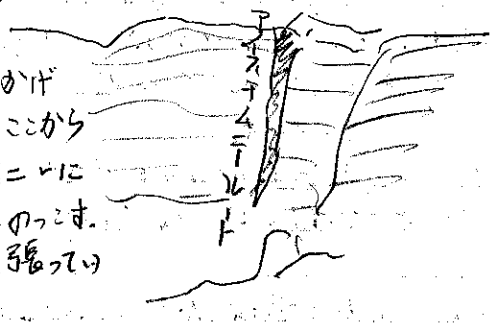
30, July, 1974

C_2の位置が C_1 からあまりにも近く高度もかせいでいない上に第4 ice fall のルート工作の基地としても遠すぎるという事で思い切って アイスフォールの下へ C_2 を移す事にした。
西内が C_1 より上ってきたので 4名で 新C_2 を設営。6人用テントをたてる。黄色で明るいテントだ。
ポン場を作ってポンをするもまたげり、いつになったら止るのかこのげりは 全くいやになってしまう。明日は ice fall の突破が第1の仕事 その後 C_3 予定地の偵察である。
新C_2 は Sherpi の絶壁からくる雪崩をさけられる場所という事でなかなかきまらなかったが ice fall の入口に良い場所があり 5260m の場所とした。C_1 との交信がちょっとやりずらい。
今日は バラ サーブ つかれで ダウン C_1 沢 酒井 Doctor が C_1 入りした。B.C には河本さんが頑張っている。ハイポーター3名は C_2 まで荷物の後 B.C へ一旦下っていった。
キャプテン、2名のハイポーターは コルコンダスへ買物らしい。
pm 7:00 ごろ C_2 の全員 ミニテントへ入るも、プディングが気にいってぬむぬむ ねいらしい。8:00 の交信の後ねる事にする。
プディングが実にうまい。2袋 4人で食べるとまもなく 消える。

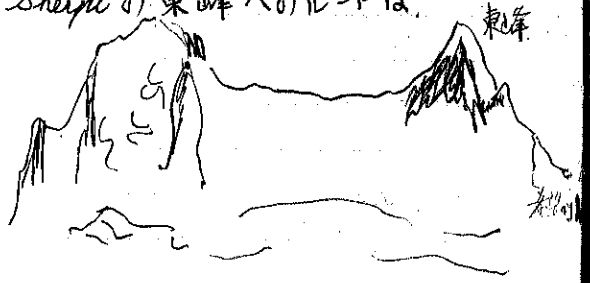
◎◎①①

31 July, 1974

6:00 起床 (夜中に3回朝一回 ポンへ行く げり)
8:00 出発
10:00 29日の最高地点
13:30 5650m 地点 赤旗4枚 ハンマー 肥デポ
17:00 fix 完了 後 C2へ帰る。
先日の最高到達
地点までトレース
とfixザイルのおかげ
でスムースにいく。ここから
ice blokのキムニドに
ハーケンをきかせてのっこす。
約30分ぐらい頑張っても
だろうか。



ついに第4ice fallにルートを開く事ができ希望のコルへの見通しもついた。C3へのルートが7月中に開く事ができ幸いである。Sherpiの東峰へのルートは、希望のコルから稜線づたいにルートを開けばコルあたりにC4をおいて東峰アタックといくべきであろう。東峰と西峰へのコルへのルートは、約7~800m~1000mほどの氷壁のルートで雪崩のあとがたえない。ルートとしてとれるものかどうか、疑問にもおもえる。



Sherpi Gang Gl.を第1ice fallからつきすぎ、4500mのコル越えとしてB.C建設。さらに第2ice fallと第3ice fallを越すのに苦労をして、C1をさらにC2をと実に長い氷河の旅をやってきた。氷河とのたたかいだ。

今日は、井上、西内、山口の3名で行動、C2より第4ice fallのルート工作、完了。いつでもC3を設営できるたいせいとなった。

酒井、ベラサーブ、Doctorの3名C1からC2へ酒井の調子悪いらしく、8:00ot~15:30 C2着という。スローペースぶり、どこまで使えるかが問題である。

河本さんは、Captainがコルコンダスへ2名のハイポーターをつれて行ったままで帰らないとかC1入りできずB.Cでもんもん。

C3へは隊員5名2回のボッカでC3入りしあとは、C2からの補給にたよる事とする。

河本さんはB.C整理後C1入りする。Liaison OfficerもC1へ入ってくる。